

各関係機関長 殿

香川県農業試験場病害虫防除所長
(公印省略)

平成30年度病害虫発生予察特殊報第1号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

平成30年度 香川県病害虫発生予察特殊報 第1号

1. 病害虫名： イモグサレセンチュウ
学名 *Ditylenchus destructor*

2. 発生作物名： ニンニク

3. 発生経過

平成30年6月、調査のため農家から持ち帰り農業改良普及センターで自然乾燥していたニンニク鱗茎に腐敗症状が発生し、病害虫防除所に診断依頼があった。生物顕微鏡で腐敗部を観察したところ、茎盤部及び鱗片内部に多数のセンチュウが確認され、香川県で未発生のイモグサレセンチュウと推定された。そこでサンプルの同定を神戸植物防疫所に依頼したところ、イモグサレセンチュウと同定された。

本種は昭和59年(1984年)に青森県で初めて確認され、その後、北海道、鳥取県、岡山県で発生が確認されている。本県においては本種による農作物被害の発生は初めてである。

4. 本種の特徴

1) 形態

成・幼虫とも体はほぼ透明で細長く糸状、成虫は長さ0.8~1.4mm。側帯にある側線は6本で口針は10~14 μ m。

2) 寄主植物

寄主植物は極めて多く、ニンニク、アイリス、ラッキョウ、バレイショでは明らかな被害が確認されている。また、ダイズ、ソラマメなどの豆類においても被害が発生する可能性があるとしてされている。

3) 被害の特徴

本種が寄生した種球を植え付けた場合、鱗茎内部の幼芽や茎盤部の腐敗により未萌芽や萌芽後の枯死を引き起こす。また、健全な種球であっても本種の発生する圃場に植え付けた場合は、本種の寄生によって生育初期の葉のねじれ等奇形が発生し、枯死する場合もある。

本種の発生する圃場で生産された種球は、一見健全であっても寄生を受けていることが多く、外観で寄生の有無を区別するのは難しい。本種が寄生した鱗片を縦割すると、鱗片貯蔵葉およびその周辺組織が褐変、あるいはスポンジ状となり、本種が多数寄生しているのが観察される。

5. 防除上の注意等

1) 寄生が疑われる種球は使用しない。

2) 発生圃場では、種球粉衣と土壤消毒の併用によって生育期間中の被害を軽減できるが、

鱗茎への本種の寄生を完全に防ぐことは困難である。

3) 発生圃場で使用した機械類は、本種拡散防止のため、十分に洗浄する。



第1図 スポンジ状になった鱗片基部



第2図 被害部から分離されたイモグサレセンチュウ



第3図 イモグサレセンチュウの口針
(矢印)

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>